
雨

木と蜜柑

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨

【Nコード】

N1231D

【作者名】

木と蜜柑

【あらすじ】

雨はときとして出会いを連れてくる。始まりは、あの日の雨の悪戯だった。

（前書き）

この度、日本文学館の超短編小説の部で佳作賞をいただくことができました。応援してくださっている皆さん、本当にありがとうございます。これからも木と蜜柑はよい作品が書けるよう頑張っていきますので、これからもどうぞよろしくお願いします。

雨は、時として出会いを連れてくる。

タンタンタン、と雫が刻む一定のリズム。
頬に絡みつく髪。

スカートの裾が足に吸い付いた不快感。
湿った匂い。

ザーザーと激しく流れる川の音。

雨は好きになれない。

「入れてもらってもいいですか？」

ぼんやりと足元を見つめていたら、ふと声がした。顔をあげると、学生帽の青年が鞆を雨避けに立っている。

「どうぞ」

少し隙間を空けてやると、決して広くない木造の軒下に、青年はすっと入ってきた。

とんと触れた肩。気付かれないようにそっと横目で顔をのぞいた。凜とした横顔。不思議と鼓動が速くなる。

「すごい雨ですね。今朝はあんなに晴れていたのに」

降りしきる雨を眺めながら青年が言った。穏やかで優しい声。父親の低いそれとは違って、不思議と頬を紅潮させた。

「そうですね……」

この青年はどこの人なのだろうか。この辺りの人なのか、それとも偶然通りがかっただけなのだろうか。

青年は、服の上を滑る雨をパタパタと静かに払う。
もう一度声を聞いてみたい。

「雨は——好きですか……？」

驚いたことに、いつの間にか口をついて出てしまった言葉。

青年は、ふっと口元を緩ませた。

「ええ。僕は雨が好きですよ。あなたは？」

雫は相変わらずタンタンタンと同じリズムを刻んでいる。

「私は……」

どうしようもなく逃げ出したい気持ちで胸がいっぱいになった。

どうしてこのようなことを口走ってしまったのか。

「雨が好きだなんて、可笑しいでしょ？ よく人に言われるんです」
初めて青年と目が合った。

黒くて深い瞳。

一層胸が高鳴る。

「いえ……」

考えてみれば、こんなに長く、同世代の男性と話をしたことがあっただろうか。話したことと言えば、ほんの二言、三言。でも、今の自分には十分すぎる会話だ。

「どうしてでしょうね、雨が好きなんて。」

青年はそう呟くと、再び視線を雨の方へ戻した。

雨が止んだら、軒下を出て行かなくてはならない。

雨よ、もうしばらくだけ降っていて欲しい。

長い静寂が訪れる。ただ、タンタンタンと雫の音と、川の音が響く。

きっと何か話すべきなのかもしれない。でも、何も話すことが浮かばなかった。だから、何も話せなかった。ときどき、ちらりと青年の横顔を盗み見るだけ。

「あ、雨が止みそうですよ」

青年のこの言葉に、異常なまでに驚いた自分がいた。

「ほんと……」

雨は嘘のようにピタリと止んだ。

空には既に青空が見え隠れしている。

「雨宿りさせてもらって、ありがとう」

青年は、ペコリと頭を下げた。

青年はさつとその場を去っていく。自分もゆっくりと軒下を離れようとする。ほんの少しの雨宿りが、やけに印象深く、遠い過去のように感じた。しかし、心の奥で何かが忘れるな、と懸命に暴れている。

ぱしゃり。

水溜りの跳ねる音。ふと顔を上げると、先程遠ざかった青年の姿がそこにあつた。

「ずいぶん道がぬかるんでいるので、気になって戻ってきたんですよ。よかったら、家の近くまで送りますよ」

夢を見ていた。懐かしい雨の日の思い出。

温かい布団の中で、すっかり老いた自分の手をじっと見つめた。

雨、すなわち別れ……。

頭上にある仏壇にすつと目をやる。

「誠一さん、今そちらに行きますからね」

眠い。眠くて目を開けていられそうもない。再びながい眠りにつく。ながいながい眠りへと。

雨、すなわち再会。

始まりは、あの日の雨の悪戯。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1231d/>

雨

2010年11月12日21時35分発行